

## 武蔵野日曜聖書講筵

## 八十九歳の峠にて

## ――詩篇第103篇1～13節――

1993年2月7日

小池辰雄

「十字架・聖霊」の事態が大事 旧約の福音 満月を懐く三日月 ブラウニングの『ラビ・ベン・エズラ』 わかやぎて鷺の如く 平伏すと上から力がくる 永遠の生命でつつ走っていく

## 【詩篇103】

ダビデのうた

1 わが<sup>たましひ</sup>靈魂よ、エホバをほめまつれ、わが<sup>うち</sup>衷なるすべてのものよ、そのきよき<sup>みな</sup>名をほめまつれ。2 わがたましひよ、エホバを<sup>ほめ</sup>讃まつれ、そのすべての恩恵<sup>めぐみ</sup>をわするるなかれ。

3 エホバはなんじがすべての不義をゆるし、

汝のすべての疾<sup>やまい</sup>をいやし、4 なんじの生命<sup>いのち</sup>をほろびより贖<sup>い</sup>いだし、仁慈<sup>いつくしみ</sup>と憐憫<sup>あわれみ</sup>とを汝にこうむらせ、5 なんじの口を嘉物<sup>よきもの</sup>にてあかしめたもう。斯てなんじは<sup>わかや</sup>壮きて鷺のごとく新<sup>あらた</sup>になるなり。6 エホバはすべて<sup>しいた</sup>虐げらるる者のために公義<sup>ただしき</sup>と審判<sup>さばき</sup>とおこないたもう。7 おのれの途<sup>みち</sup>をモーセにしらしめ、おのれの作爲<sup>しわざ</sup>をイスラエルの子輩<sup>こら</sup>にしらしめ給えり。8 エホバはあわれみと恩恵<sup>めぐみ</sup>にみちて

怒りたもうことおそく

仁慈<sup>いつくしみ</sup>ゆたかにまします。9 恒<sup>つね</sup>にせむることをせず永遠にいかりを懐<sup>いだ</sup>きたまわざるなり。10 エホバはわれらの罪<sup>か</sup>の量<sup>かさ</sup>にしたがいて

我等をあしらいたまわず、



われらの不義のかさにしたがいて報いたまわざりき。

11 エホバをおそるるものに

エホバの賜うそのあわれみは大いにして、

天の地よりも高きがごとし。

12 そのわれらより愆<sup>とが</sup>をおぎけたもうことは

東の西より遠きがごとし。

13 エホバの己をおそるる者をあわれみたまうことは

父がその子をあわれむが如し。

### ●「十字架・聖霊」の事態が大事

今日は詩篇の第103篇1節から13節まで、これと連関してお話したいと思います。私の信仰生活は惨憺たるものですが、この103篇はそれに相応しい福音的な詩篇で、私は非常に好きです。旧約の福音的な詩篇です。

全く、光陰矢の如しで、知らない間に私はもう89歳になりました。

#### 「十字架・聖霊」

この信仰の構造は、私にとっては不変なんです。十字架ぬきの聖霊ではあぶない。十字架だけではダメ。パウロは十字架を土台にした聖霊の世界です。パウロの福音は本当に素晴らしい。キリストの福音を最も完璧に表しているのは、何といってもパウロです。彼は実はキリストの最大の敵であった。クリスチャンを迫害していた男が完全にひっくり返って、そして、

#### 「わが眼より鱗の如きもの落ちたり」

と、聖霊のバプテスマを受けて、そして彼は本当に十字架を受けとった。パウロがなければ、この福音の世界は正しくは伝わらない。それくらい大事な器です。だから、復活のキリストがパウロをダマスコ途上でとつかまえた。ひっくり返した。イエス・キリストとかたは大変なかたです。お釈迦さんがいくら偉くたって、キリストとはケタが違う。イエスは本当に大変なかたで、私は、

#### 「主さまー」

と言えば、もうその一言でキリストの中に飛び込みます。

そういうわけで、

#### 「十字架・聖霊」

の事態が大事です。ちろん、

#### 「復活の生命」

がその間にありますけれども。復活なんていっても、息を吹き返したのではない。キリストの霊生が現れたというだけのはなしです。



本当の歴史は個が、個人が展開していく。

「個の生命を失わば、全世界を得るといえども何かあらん」

とキリストが言われた。イエス・キリストは非常に個を重視された。いい加減な九十九匹よりも、谷底に落ちた一匹の羊を顧みる、という。

「我は罪びとを招かんために来たれり」

と仰った。そういうわけで、あなた方一人ひとりは天下一品なんです。人格の世界は比較してはいかん。

「あれがどうだ、こうだ」

なんて、比較はひとつも要らん。それぞれが絶対的な存在なんです。神・キリストに在つての絶対性ですよ、手放しの絶対性ではない。手放しでは、我々はみな相対的な存在に相違ない。けれども、神・キリストに在つては、一人ひとりが絶対的な欠け代えのない存在ですから、そういう自覚はしつかりもつていただきたい。

## ●旧約の福音

私の著作集第十巻『聖書は大ドラマである』の4月30日「旧約の福音」のところに詩篇103篇のことが書いてある。

「この詩篇103は、ある意味で詩篇全150篇中の最大なるものとも言い得るほど福音的である。地獄的ななやみの第102に対してこの詩篇は天国的である。それはイザヤ書第34章と第35章の闇と光の如く、ロマ書第7章と第8章の死の苦しみと生の歓喜の対比の如くである。」

神の讃美は心魂と五臓六腑、即ち全身的なものであれ。神は一切の不義を無条件にゆるし、どんな病患も根源的に癒し給う。それは全身を神・キリストの中に投入するときに！ 驚くべき聖霊のはたらきを体験させられる！

神・キリストの愛は不滅！ キリストの義を与えてくださる。そのめぐみを身証して子らにつたえよ。天の万軍が味方だ、聖意を体現せん、贖われた無者として。」

キリストは無者でした。自分を何ものとしなかった。だから、私はキリストのことを

「無者」

という。こんなことを言う人は他にないでしょう。神一切だから、己が無いから、だから「無者」なんだ。我々は

「キリストに贖われた無者」

なんだ。

「己を愛するは最大の悪である」

とは西郷南洲の言葉です。南洲というひとと素晴らしい。私は大人物といえば、西郷南洲と思っている。



「生命も要らず、名も要らず、官位も金も要らぬ人は始末に困るものなり。かくの如く始末に困る人ならでは艱難を共にして国家の大業は成し得られぬなり。」

とある。素晴らしい言葉だね。突き抜けた魂です。自分なんかをいつまでも問題にしていたらダメです。

「私の信仰は……」

なんて、私の信仰もヘツタクレもあるかというんだ。上から来ているキリストの信を頂いて平伏してしまう。大事なことは平伏することです。全存在がキリストの前に平伏さなければ、「信仰、信仰」

なんて言って、

「自分の信仰がどうだ、こうだ」

と、そんなことを言つて、信仰を私しているような世界はダメなんだ。「信仰」を私してサムシングにしている。そんな信仰はダメなんだ。くたびれてしまう、そんなのは。突き抜けた空っぽのところに充滿してくる。

### ●満月を懐く三日月

人間小池は三日月みたいなやつです。けれども、三日月が満月をいだくんです。満月が三日月を懐くのではない、逆なんだ。不完全な――不完全どころじゃない――デタラメみたいな奴がキリストでもって贖われた。そうすると、三日月みたいなやつが完全な満月を約束されている。上弦の月は満ちてゆく。完全性を持っている。なぜ私は懐くかと言うかというと、この三日月は完全を持っている満月ではない。完全性を持っている。だから、必ずこれは満月になる。我々一人ひとりは地上ではみな三日月みたいなものだ。けれども、天界に行くと、その人らしい完全性になっていく。キリストの恵みの力で。

全体主義ではない。一人ひとりは全部、特殊な大事な絶対的な存在、使命的な存在です。みんな使命がある。神の栄光を表す、身証者です。キリストに在ると、もの凄い力が来ますから。キリストぬきにしたら、人間はもうダメです。キリストに在ってはもの凄い力です。こっちは無い。

キリストがそうだった。自分を何ものともしなかった。神一切だったから、

「我を見し者は父を見しなり」

と言った。自分を何ものともしなかった人が

「私を見た者は神さまを見たんだよ」

と。私たちは

「私を見たものは、キリストを見たんだよ」

と、本質的には、それが言えなければダメなんです。

よく、クリスチャン同士でゴタゴタやっているのは、しょうがないよ、どうせ、みんな



罪びとではないですか。それを

「どうだ、どうだ」

と言つて一体何になるか。赦された人間はお互いに本当にゆるす。キリストに赦されながら、人をゆるすことができないのはクリスチャンではない。サタンだ。

雲はあるけれども、いつも、雲の上の、雲界を下に見ているような上の空間に我々は生きていくんだ。地上ではない。私は今、詩を書いていますけれども、詩の世界はまさにそういう現実で書いている。地上で書いているのではない。もうひとつ次元の違った所で書いている。本当ですよ。

### ●ブラウニングの『ラビ・ベン・エズラ』

ブラウニングの『ラビ・ベン・エズラ』という詩がある。ラビ・ベン・エズラというのは12世紀のユダヤの思想家で、キリスト教徒に迫害された。方々を漂泊したけれども、非常に真理に対する熱愛をもっていた。そこをブラウニングは見た。イスラエルの預言者のな人間です。その詩の最初の句は、

1 Grow old along with me!

The best is yet to be,

The last of life,

for which the first was made:

Our times are in His hand

Who saith A whole I planned,

Youth shows but half, trust God:

see all nor be afraid!

1 私と一緒に歳をとりなさい。

最善はこれからだ

人生の最後は、その為に最初があつた。

我々の人生の各時期は彼（神・キリスト）の手の中にある。その神は、

「一人ひとりのすべてをちゃんと計画している。

青年時代はまだ半分に過ぎない。

神さまを信頼しろ、そして

一切を見る、決して懼れるな。」

私も、その通りです、

「私と一緒にいくらでも歳をとりなさい。最善はこれからだ」

と。私の最後の仕事が、

「最善がこれから待っている」



から。

キリストの永遠の生命を我々はいただいているのだから、歳なんか問題ではない。年齢なんか超越して、張り切りすぎるを得ない。

「がんばれ」

ではない。頑張る必要はない、上から力がくるから。上から力が来ないような信仰は信仰ではない。

「私の信仰は……」

なんて言って、自分の信仰を顧みているような信仰はダメなんだ。私の言葉は乱暴だけれども、気合はわかるでしょ。クリスチャンはくすぶってなんかない。燃えていなくては。

●わかやぎて驚の如く

では、詩篇103篇に入ります。

1 わが<sup>たましひ</sup>靈魂よ、エホバをほめまつれ、

わが<sup>うち</sup>衷なるすべてのものよ、そのきよき<sup>みな</sup>名をほめまつれ。

素晴らしいね、これは、

「五臓六腑よ、聖名を讃美せよ」

と。「エホバ」と言っても、我々には「キリスト」です。旧約を読むときに、必ずキリストの光で読んでください。我々は、ユダヤ人みたいに旧約を旧約として読んでいるのではないのだから。キリストの光で読むと、旧約が生きてくる。キリストは旧約とは言わない。

「あの書物は私について証しているのだ」

とある。だから、逆に言うと、

「私の光でよみなさい」

ということだ。クリスチャンは旧約をキリストの光で読まなかったらダメです。電灯の光ではないんだ。

2 わがたましひよ、エホバを<sup>ほめ</sup>讃まつれ、

そのすべての恩恵<sup>めぐみ</sup>をわするるなかれ。

3 エホバはなんじがすべての不義をゆるし、

汝のすべての疾<sup>やまい</sup>をいやし、

4 なんじの生命<sup>いのち</sup>をほろびより贖<sup>い</sup>いだし、

仁慈<sup>いつくしみ</sup>と憐憫<sup>あわれみ</sup>とを汝にこうむらせ、

私は正直、愛されています。「主われを愛す」という歌があるね。あなた方一人ひとりとって、あれが本当に自分の歌にならなければダメですよ。

「なんじの生命をほろびより贖<sup>い</sup>いだし」

とは、十字架の贖いです。



5 なんじの口を嘉物<sup>よきもの</sup>にてあかしめたもう。  
斯<sup>わかや</sup>てなんじは壮<sup>あらた</sup>きて鷺のごとく新になるなり。  
「鷺のごとく新になるなり」ではなく、もうなっていると読む。

「わかやぎて鷺の如くである」

というイザヤ書のあの言葉は、正直、聖霊をいただいていると、我々は皆あまかける。魂が天翔<sup>あまかけ</sup>る。あなた方、いわゆる相対的な地上を歩いているような気持ではダメだよ、空を飛んでいるような気持でなければ。

「わかや 壮<sup>あらた</sup>きて鷺のごとく新なり」

と、我々は聖霊でもって鷺の如くに飛びかける。

●平伏すと上から力がくる

6 エホバはすべて虐<sup>しいた</sup>げらるる者のために  
公義<sup>ただしき</sup>と審判<sup>さばき</sup>とおこないたもう。

地上では随分、不公平にみえたり、

「神さまは不公平だな」

なんて思ったりする。ところが、不公平でも何でもない。ちゃんと知ってらっしゃる。次の世界にいくと、皆こちらでもっていい加減で幅をきかせていたやつらはひっくり返って、ヘタすると、地獄へ落とされる。こちらで苦しんだ人たちは、天界でもって素晴らしいところに置かれる。

7 おのれの途<sup>みち</sup>をモーセにしらしめ、

おのれの作<sup>しわざ</sup>為をイスラエルの子輩<sup>こら</sup>にしらしめ給えり。

8 エホバはあわれみと恩恵<sup>めぐみ</sup>にみちて

怒りたもうことおそく仁慈<sup>いつくしみ</sup>ゆたかにまします。

全くそのとおりです。「あわれみと恩恵」という言葉はよく出てくる。

9 恒<sup>つね</sup>にせむることをせず

永遠<sup>いだい</sup>にいかりを懐<sup>いだ</sup>きたまわざるなり。

「いかり」は実は「あわれみ」の別な現れかたなんです。これはルターがそう言っている。その通りです。神さまの怒りというのは人間的な怒りとは違うんだ。だから、いかなる時にも、平伏することが大事なんです。平伏すと必ず上から力がくる、光がくる。平伏さない魂はダメです。福音書は、まず平伏して福音書の現実の中に自分を投げ入れないと、本当の意味で扉はあかない。キリストに降参しない限り。

「これはどういう意味だ。そんなことはあるか？」

なんて思ったら、絶対にダメです。聖書批判学なんて下らないことをやるものだからね。賀川先生は素晴らしいひとです。私は、賀川先生を近代のキリスト教界の第一人者だと



思っている。内村先生ではない、賀川先生です。内村先生はいろいろなことは言った。けれども、生活そのものでどん底を歩いたのは賀川豊彦です。本当の証し人です。

10 エホバはわれらの罪の量にしたがいて我等をあしらいたまわず、われらの不義のかさにしたがいて報いたまわざりき。

11 エホバをおそるるものにエホバの賜うそのあわれみは大いにして、天の地よりも高きがごとし。

「おそれる」とはこわがることではない。畏まって平伏すことです。「キリストの前に平伏すものは」ということ。

12 そのわれらより愆をとおぎけたもうことは東の西より遠きがごとし。

13 エホバの己をおそるる者をあわれみたまうことは父がその子をあわれむが如し。

私は床の上に平伏して祈ります、寝る時も起きるときも。手紙や何かでよく、「祈ります」なんて書くが、みんなひとつも祈りはしない。私は必ず祈ります、書いた限りは。いつわりは一番いいかん。

「間違えました、すみません」

と、正直に言うことがいいので、つくろうことはダメなんだ。偽りの世界は、本当の力がこない、光がこない。躓いたって転んだっていいんだよ。人間はどうせみんな同じようなものだから。ただ、いつも平伏して、そしてキリストの力でもって立ち上がっていく。必ず立ち上がって行けるから。

詩篇の103篇は非常に福音的な詩篇で、私は詩篇の中では一番好きだといつてもいいかも知れない。特に1節から13節までは素晴らしい。全く福音です。「十字架・聖霊」の世界です。

### ●永遠の生命でつつ走っていく

「長寿吟」という言葉がある。

「五十の歲月は人生の半ばなり。」

七十にして豊饒たり、壯者を凌ぐ。

八十の道は静かに風月を楽しみ、

百歳にして初めて天寿の花とひらく。」

百歳でなければ天寿ではないというわけだ。だから、百歳まで生きなければならない。

『ラビ・ベン・エズラ』の詩の中には、こういう句もある。

25 Thoughts hardly to be packed

Into a narrow act,

Fancies that broke through language



and escaped;

All I could never be,

All, men ignored in me,

This, I was worth to God, whose wheel  
the pitcher shaped.

25 狭苦じぎ行為の中に

包み込み得ざる思想

言葉をはみだし破って逃げいく想像

私が望めど、なり得ざりし一切

私の中にあるのに人々が無視したすべて

これぞ神に対する私の価値である。

神のろくろはこの壺を造ったのだ。

ブラウニングという人はとてもケタはずれなことを言う詩人だね。

32 So, take and use Thy work:

Amend what flaws may lurk,

What strain o' the stuff, what warpings

past the aim !

My times be in Thy hand !

Perfect the cup as planned !

Let age approve of youth, and death

complete the same !

32 されば神さまの作品を破りて用いたまえ

修正なしたまえ、潜める傷を。

素地の無理を、御意図を超えた歪みを。

わが時はあなたの御手の中にあり。

御計画の如くこの壺を完成なし給へ

老年をして我が歳を肯定せしめ

死をして天寿を全からしめよ。

ドイツでは何といってもゲーテですが、このブラウニングは別な意味で素晴らしい詩人です。

私は89歳であろうと何歳であろうといいですよ。とにかく、永遠の生命でつつ走っていきまますから。

